

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

September.2018

No. 55



関東学院大学の挑戦「新キャンパス・プロジェクト」

持続可能な発展を目指し、2022年横浜都心部へ進出

関東学院大学が新キャンパスを関内駅前に開設

2022年、JR関内駅前に関東学院大学の新しいキャンパスが誕生します。地上17階・地下2階の高層ビルを拠点に、国際都市・横浜に相応しい教育を展開します。今号では6ページにわたり、新キャンパス開設計画に関する情報をお伝えいたします。まずは増田日出雄理事長に、本プロジェクトの概要と経緯を語っていただきます。

横浜の中枢に相応しい教育を展開

関東学院大学は、横浜市が公募していた「教育文化センター跡地の活用事業者」に応募し、本年3月15日に正式に決定を受けました。2022年4月の開設に向け、地上17階・地下2階からなる都市型高層キャンパスの建設計画を進めてまいります。

教育文化センターがあった関内・関外地区は、行政・商業が盛んで、利便性に優れ、観光資源も豊富なエリアです。市民、企業、起業家、外国人、自治体など様々な主体が集積する環境で、関東学院大学が近年推進している「社会連携教育」をさらに強化してまいります。また、このエリアでは「横浜スポーツタウン構想」をはじめとした、新たなまちづくりが進行中ですので、文化・スポーツ等において、私達の様々な

知的資源を活用していただける機会もあるでしょう。

新キャンパスには、社会科学系の学部学科に所属する約2500名の学生が通予定です。周辺の街に新たな賑わいが生まれることは、横浜市が重視している「国際的な産学連携」「観光・集客」というテーマとも合致し、街と大学が一体となって発展していくと期待しております。

また、社会人が必要に応じて大学等で学び直す、いわゆる「リカレント教育」にも精力的に取り組んでまいります。技術進展の著しい現代社会において、10年前に習得した技術はほとんど使い物になりません。社会人や企業等

新キャンパスはなぜ必要か 大学を取り巻く社会の変化

今、大学を取り巻く環境は大きく変化しています。背景の一つに挙げられるのが「18歳人口の減少」です。2017年に約120万人いた18歳人口が、2030年には約103万人、2040年には約88万人まで減少すると試算されています。文部科学省の推計によれば、今後の大学進学率はほとんど伸びず、多くの大学において経営が成り立たなくなるとの指摘もあります。私達はこうした変動に対して十分耐えられるような対策を講じていかなければなりません。

また、大学のあり方や人材育成ニーズも変わりつつあります。人間の仕事がAIやロボットに置き変わろうという時代に、専門知識や技術を習得するだけでは社会で通用しません。地域や社会と接点を持ちながら、課題を自分で見出す力、情報を整理して解決に導く力、身につけた知識や技術を活用する力、多様な人々と協働していける力を育成する教育が求められています。そのためにも多様な主体と連携できる横浜都心部に、大学が自ら出ていく必要があることも、今回の事業の動機となっています。

積年の努力が実った 横浜都心部への進出

地域に根ざした教育を標榜する関東学院としては、以前から横浜市の中心に出て教育をしたいの思いがありました。私が学院に来て9年目になりますが、その間に

を対象としたプログラムを、様々な学問分野で機能させていきたいですね。



もみなとみらい地区や北仲地区などへの進出を検討したもの、入札方式ではホテル業者やマンション業者に太刀打ちできないのが現状でした。

しかし、今回の横浜市の公募は、関内駅周辺のまちづくりと絡めた提案重視のプロポーザル方式で実施されました。私達はこれを大きなチャンスと受け止め、プレゼンテーションを行い、結果として非常に高い評価をいただくことができました。

今回の投資にあたっては、老朽化した校舎の建て替えに備えて、減価償却として積み立ててきた資金を使用します。同じ額を投資するならば、既存のキャンパスの校舎を建て替えるより、横浜都心部に新たな拠点を構えたほうが、関東学院の将来にずっとプラスになることと確信しています。

私としては、新キャンパスをモデルとして、授業や事務を含めたオペレーションで先端技術の導入や合理化を進め、学内全体の経営の効率化にも取り組みたいと考えています。我々経営陣、教員、職員からのメンバーで構成するワーキンググループにおいて様々な検討を行い、皆様のご理解をいただきながら進めていくつもりです。



経緯（2018年8月現在）	
2016年1月	横浜市現市庁舎街区、港町民間街区、教育文化センター跡地活用に関するサウンディング型市場調査を実施
2017年3月	同跡地活用に係る計画を横浜市へ提案することを理事会で承認
2017年10月	プロポーザル方式による同跡地活用事業者公募開始
2018年1月	応募資料を横浜市へ提出
2018年2月	プレゼンテーション実施
2018年3月	事業者として内定
2018年6月	同跡地の売買契約を締結

地域と信頼しあいながら共に発展していく

新キャンパス開設計画が発表されて以来、周辺の企業や関係者の方々にお会いしますと、有り難いことにどの方も歓迎のお言葉を掛けてくださいます。その中には本学院の卒業生も多くいらっしゃいます。私はそれこそが連携教育の礎だと感じています。地域の皆様に愛され、多くの接点を持ち、信頼を築いていけば、企業の方々も様々な相談に来てくださるでしょうし、学生の教育にも資することになるでしょう。このチャンスを大事にし、成功へと導けるよう一丸となって取り組んでまいります。新たなステージへと向かう関東学院に、今後ともご期待ください。



学校法人 関東学院 理事長

増田 日出雄

1962年関東学院大学経済学部経済学科卒業、日本揮発油株式会社(現日揮)入社。2002年同社代表取締役副社長、2006年同社代表取締役副会長就任。2009年7月学校法人関東学院常務理事・評議員を経て、2013年4月学校法人関東学院理事長就任。

関東学院大学の挑戦「新キャンパス・プロジェクト」

四つのキャンパスの機能を活かした魅力ある大学へ 新キャンパス構想と社会連携教育への取り組み

横浜をホームタウンとして、地域に根ざした教育を実践してきた関東学院大学。新キャンパスで期待されるのが、様々な交流をベースにした「社会連携教育」の推進です。また、4か所に分散するキャンパスの「機能分化」にも同時進行で取り組みます。そこで今回のプロジェクトの意義について、規矩大義学長がお話しいたします。

関東学院大学が目指す 社会連携の新たな拠点

関東学院大学は、JR関内駅近くの横浜市教育文化センター跡地に、2022年4月に新キャンパスを開設します。同キャンパスでは、学生だけでなく、企業・自治体・市民などに開かれた教育プログラムを設置し、イノベーション拠点を目指します。そして、横浜都心部に拠点を持つことで、私達がいま最も力を入れている「社会連携教育」をさらに推進していきます。

学生が地域社会に出て企業や自治体と共に学ぶ社会連携は、最近のトレンドであり、どの大学も重要なテーマとして位置付けています。しかし、ただ学生を社会に送り出して何かを経験させたり、企業や自治体に指導をお願いするだけでは、主体性のない他力本願的な教育に終始してしまうで

しょう。

関東学院大学の考える社会連携教育は、学生が早い段階で本格的に社会に出て行き、いかに自分が未熟か、いかに知識が足りないかを実感することから始まります。そして、大学に戻って足りない部分を主体的に身につけ、再び社会で実践するというサイクルを繰り返すことを重視しています。その目標を手助け、達成させるため、教員も今以上に実践的な取り組みが必要です。そのためには、実社会にできるだけ近い場所で、多くのこ



▲多様な主体が集うイノベーション拠点

とを感じ取り、追究できる拠点を持つことが重要です。その意味で、開港以来の国際都市で、横浜の経済・文化の中心地である関内・関外地区は、これ以上ない理想的な環境と言えるでしょう。

社会での実践から 学ぶ3つの学部学 科を移転

新キャンパスには、その地域性を活かし、社会連携教育に特に積極的に取り組んでいる3つの学部学科を移転します。社会連携教育プラットフォーム「Kibi



z」を基盤に様々なプロジェクトに挑戦する経営学部経営学科、県内の11自治体が担当する授業や地域に根ざしたフィールドワークなどを行う法学部地域創生学科、そして海外と連携したグローバルな実践教育に取り組む人間共生学部コミュニケーション学科です。また、大学全体の社会連携の総合窓口として機能させ、学生達の学びと、地域社会との連携をサポートします。

新キャンパスでは、大学の教育施設のみならず、低層部に市民にも開放する施設やコワーキングスペースなどを設け、学生と市民、企業人との自発的な交流や新たなイノベーションの創出を促します。立地の良さを活かし、社会人や市民を対象としたプログラムも充実させます。都内や横浜で仕事をした後でも十分に学べるので、卒業生の方々にも新たな知識習得の場として活用していただければと思います。

機能と目的を分化して キャンパスを有効活用

新キャンパス設置に伴う、もう一つの重要なミッションが「キャンパスの機能分化」です。タコ足大学と揶揄する言葉も生まれるほど、現在、どこの大学も分散したキャンパスの統合が大きな課題となっています。本学は昨年度に小田原から金沢八景へと法学部を移転しましたが、教育の環境はできる限り一つにまとめた方が、学生一人ひとりに対してきめ細かいサービスを提供できるだろうと感じています。そのため、新キャンパスの開設と同時に国際文化学部と社会学部は金沢八景へと移転する予定で

す。そして、四つのキャンパスの役割を明確にし、機能分化します。

湘南・小田原キャンパスは、じっくり研究に向き合える環境と充実した設備を活かし、今後も研究・研修拠点として運営していきます。

横浜・金沢文庫キャンパスは、スポーツ施設を中心としたキャンパスとして、学生の課外活動に活用したいと考えています。

新キャンパスと横浜・金沢八景キャンパスは、学び方の異なる二つのキャンパスとして使い分ける計画です。新キャンパスは、実社会をフィールドとした社会科学系の学部学科が学ぶ、先進的なキャンパスとして使用します。そして、横浜・金沢八景キャンパスは、専門的な研究設備や最新の実習設備を有する理工系や資格系、および従来の大学らしい伸びやかな環境で学問と向き合う学生のためのキャンパスとなります。目的別に整備することで、教育の質や大学全体のサービスが向上すると共に、受験生にとっても選択肢が増えることとなるでしょう。

教育を可視化して 新たな連携の 追い風に

関東学院大学は近年、企業や地域との連携において一定の成果を上げてきましたが、



関東学院大学 学長

規矩 大義

1993年九州工業大学大学院工学研究科博士後期課程修了。横浜国立大学助手を経て、官民の防災研究の職場を経験。2002年関東学院大学工学部着任。2013年12月学長就任。2017年再任（2期目）。専門は地盤防災工学。

今新たに考えているのは「大学との連携」です。少子化が進む中、大学同士が学生を取り合うのではなく、互いの特長を生かして共存していくために何ができるのか。私達の規模の大学こそ率先して考えなくてはいけないと感じています。今回のプロジェクトは、そうした新たな連携にも追い風となるはずです。

横浜都心部にキャンパスを構える以上

は、関東学院大学の教育を、今まで以上に地域の皆様の目に見える形で表現していかなくてはなりません。甘い考えでは決して通用しないでしょう。そうしたプレッシャーの中で、学生達には自己を高めていってほしいですね。そして、あの場所で教育することの意味を、ぜひ教職員の方々にも感じていただきたいと思います。

関東学院大学の挑戦 「新キャンパス・プロジェクト」

地域の新たな活力の原動力として多様な機能を搭載 新キャンパスの施設概要

新キャンパスのコンセプトは、知の交流拠点「オープンナレッジポート」の創設です。既存の大学のイメージを超えた、開放的なキャンパスと魅力的な機能により、様々な主体が集まり交じり合い、新たなイノベーションを誘発します。大学経営課の芦澤力課長が、新キャンパスの設備をご紹介します。

周辺環境と外観

街のランドマークに相應しいデザイン

関内・関外地区は現在、官民一体のまちづくりが進行中です。「横浜ユニテッドアリーナ」「横浜武道館」などの建設も予定され、文化・スポーツ面において再開発が進んでいます。

JR関内駅から徒歩約2分の新キャンパスは、地上17階・地下2階の高層ビルです。横浜の歴史・文化を継承しつつ、進取の精神や多様性に満ちた街に相應しいデザインを目指します。中層部には透明性が高く立体的なガラスファサードを採用し、開放的でありながら西日を遮蔽します。外からも建物内の人々の動きが感じられ、夜には内部の照明が透過して街に賑わいをもたらします。また、低層部には一部レンガを採用

するなど、新旧が交じり合うデザインです。

建物周辺は、大通り公園や関内駅に向けてオープンスペースを確保し、人の流れを誘導すると共に、街との一体感や連続性を演出します。

低層部

「コミュニティゾーン」様々な仕掛けで集客に貢献

キャンパス低層部は、市民にも一般開放する施設やアクティビティを充実させます。大通り公園側のオープンスペースと連続した空間「サンクンガーデン」を地下1階に設置。「ブックカフェ」を併設し、地域の知の交流を促します。サンクンガーデンには屋根や給排水設備があるので、イベント等にも活用できます。

中層部①

「産学連携・国際交流ゾーン」国内外の産学官連携を促進

中層部でも様々な人々が行き来します。学生や社会人、起業家などが協働可能な「コワーキングスペース」を設置し、併設

1階には「オープンカフェ」のほか、「ラウンジステーション」や「クライミングウォール」を設置し、地域のスポーツマインドを誘発します。ロッカー・シャワー完備で、学生には空き時間などに利用していただきたい施設です。

2階から4階を使って設置する700人規模の「ホール」は、シンポジウムや学校行事のほか市民にも開放し、地域の集客に貢献します。また、ホワイエを「ギャラリー」として利用し、文化・芸術活動を支援します。

中層部②

「アクティブラーニングゾーン」思いのままに学べる空間が充実

自由に配置できるテーブルやチェアなど、グループワークや自習に適したフロアです。6階と7階をつなぐ階段状の「ステップホール」は、講義やプレゼンテーションなど幅広く活用できる空間で、スポーツのパブリックビューイング開催など



▶ 700名収容可能なホール



◀ 多くの人で賑わう地下1階



も検討しています。7階には学生、教職員、来訪者の憩いの場として、緑豊かな「フォレストテラス」を設置。この緑のテラスは街の景観にも大きな効果をもたらします。

高層部

「講義室ゾーン」学生や受講者のための多彩な設備

大小様々な教室やゼミ室など、フレキシブルに利用できる環境を整えます。日常の授業はもちろん、社会人の学び直し、市民や企業向けの各種セミナー、生涯学習にも使用する予定です。吹き抜けや空間の広がり重視し、眺めの良さも手伝って、快適な学びの環境を実現します。

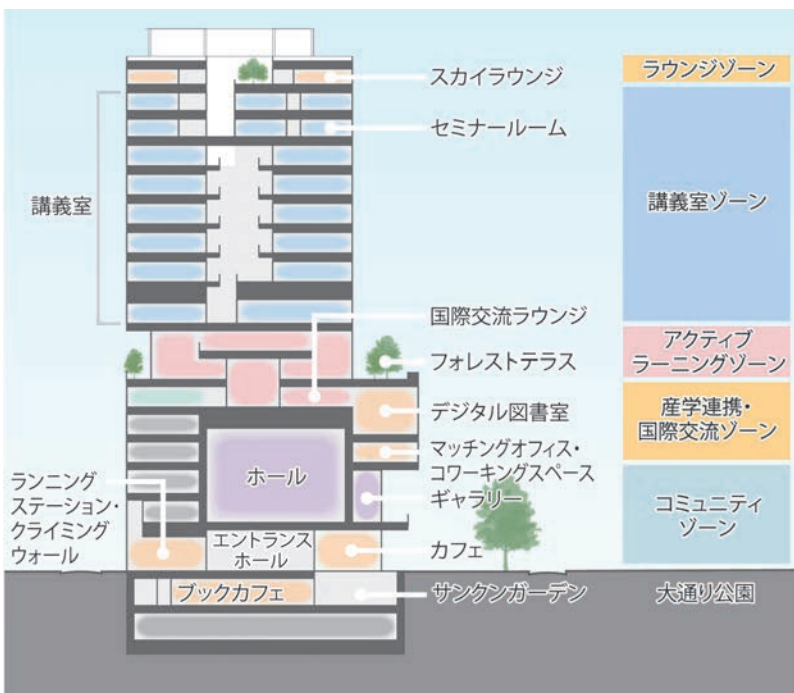
最上階

「ラウンジゾーン」関東学院の新たな交流拠点

最上階のフロアには、眺望を生かした「スカイラウンジ」やレストランの運営などを検討しています。例えば大きな学会や国際会議をホールで開催し、教室で分科会を実施した後、懇親会をスカイラウンジで行うなど、全館的な使用も



▶ 透明性の高いコーナー部



※ 2018年8月現在の情報です。施設等の計画は変更となる可能性があります。



関東学院大学 大学経営課 課長

芦澤 力

*

このように新キャンパスでは、大学がラウンドテーブルの役割を果たし、様々な「知の交流」を促進して、地域の活性化と学生のさらなる学びを推進します。関東学院大学の新たなチャレンジにご注目ください。

法の知識を活かし、地域創生に貢献する人材育成を実践 さらなる教育の拡張に挑む「法学部」

法学部は昨年、横浜・金沢八景キャンパスへの移転を機に「地域創生学科」を開設しました。法学科では座学中心のスタンダードな法の学びを軸に、公平・公正な人材育成を、地域創生学科では法的思考をベースに、地域と連携した実践的な学びを展開しています。移転から1年半を経て、その目指す先と新たな取り組みを村上裕学部長にうかがいました。

現場の声を直に聞く 「地域創生特論」

地域創生学科を開設して1年半が経ちました。現場の声を聞き、現場で学ぶという地域創生学科の様々な取り組みが、学部全体に浸透し、積極性のある学生が増えたと感じています。先日、自ら企画して地方自治体やNPOと交渉しインターンシップを実行した学生達がいたのですが、それは法



▲ 学生に熱く語り掛ける平井竜一逗子市長



▲ 本学卒業生でもある山梨崇仁葉山町長の講義

学科の学生が中心でした。今後もキャンパスに留まらず、地域と連携とした教育を推進し、相乗効果を図っていきます。

昨年度に開設した「地域創生特論」は、神奈川県内の11自治体が各1科目を担当し、首長や職員が講義をする科目です。地域で問題の解決に尽力する方々の話を、学生が直接聞くことができ、今年度は受講者も増えています。来年度は新たに「地域創生特論（沖縄）」を、本学の科目として沖縄大学

で開講する予定です。これは、後述する「沖縄創生まじゅんプロジェクト」の一環として行われる授業で、同時中継や双方向システムを導入し、横浜にいながら、沖縄県内の自治体や企業による講義を受けることができます。

地域に飛び込んで学ぶ 「演習」「インターンシップ」

地域創生学科では、地道なフィールドワークを通じて、持続可能な地域のあり方や施策を考える「地域リーダー育成演習」や「防災復興演習」を実施しています。指導するのは、自治体での実務経験を持つ教員達です。

一例として、春学期の「地域リーダー育成演習」では、過疎化が進む群馬県上野村での調査・撮影・取材とプロモーション動画の制作に取り組みしました。住民の方々にも村の魅力を再認識していただき、地域作りの活力につなげることが学生達の狙いで



▲ 群馬県上野村で地元住民を取材する学生達

す。法学部では、こうしたフィールドワークを強みとして成長させ、枠を広げていくつもりです。

また、今年度初めて学部独自の「自治体等インターンシップ」を実施しています。県内の自治体、消防局、警察署、企業にご協力をいただき、夏休み期間に65名を派遣しました。法学部には将来の進路として公務員を考えている学生が多く、様々な形で現場の実態を知ることが有効だと考えています。

トップランナーから学ぶ 「シンポジウム」

今年6月に地域創生学科開設1周年および地域創生実践研究所設立を記念し、岩手県の遠増拓也知事を招いて、「被災地の復興とこれからの地域創生の可能性」をテーマとするシンポジウムを開催しました。学生も議論に参加し、震災復興の視点から、地域作りのヒントや課題を見出すなど、日々の学びの糧としています。法学部では

▼ 岩手県・遠増拓也知事による講演の様子



様々なネットワークを活用し、こうしたシンポジウムを積極的に開催しています。最前線で活躍する方々の言葉は、学生はもちろん、教員にも大きな刺激となります。12月1日には、東京裁判判決から70周年を記念して、東京裁判研究の第一人者であるハワイ大学・戸谷由麻教授による講演会を開催予定です。

全学的な新しい取り組み 「沖縄創生まじゅんプロジェクト」

今年6月、内閣府が進める「地方創生支援事業費補助金（地方と東京圏の大学生対流促進事業）」に、本学の申請した「沖縄創生まじゅんプロジェクト」が採択されました。沖縄大学との連携プロジェクトで、相互に国内留学しながら、自治体や企業と協働し、沖縄の地域振興に寄与する学びを展開します。本学と大学間交流協定を結ぶ沖縄大学には、今年度、法学部の学生4名が国内留学していることもあり、我々法学部が中心となってプロジェクトの企画・申請に携わってきました。

この夏休みには、法学部5名、経済学部1名の学生が、沖縄大学が以前から実施している、沖縄の魅力発見プログラムに参加しました。本学のプログラムは、来年度からの本格始動に向けて現在、準備を進めています。

例えば、沖縄出身の学生が「沖縄でのインターン体験プログラム」を活用すれば、単位を取得しながら、地元での就職活動が可能となるでしょう。他にも、現地のNPO団体が主催する沖縄式地域円卓会議

日本全体を活性化する 学びの場として

2022年には、関内に新設されるキャンパスに地域創生学科が移転します。官庁街でもあり、利便性の良さから、さらに連

への参加や、酒造組合などと連携し、地場産業を体験するプログラムなど、様々なコンテンツを予定しています。私としては、同様の取り組みを、他の自治体にも広げていきたいですね。被災地の大学と組んで魅力発見プログラムを実施するなど、様々な可能性が期待できます。

携が進めやすくなるでしょう。現キャンパスに残る法学科とも、遠隔システムによる同時開講授業やオンデマンド配信など、新しい取り組みを検討中です。法というと、裁判やトラブル解決のための判断基準というイメージが強いですが、「法律は新しい社会を作るための設計図」でもあります。多様な特性や問題を内包し、日本の縮図ともいえる神奈川県をフィールドに、法の新たな役割や地域の施策について学ぶ場として、日本全体の地域活性につながる学部学科になつていきたいと思っています。



関東学院大学 法学部 学部長

村上 裕

東京都出身。一橋大学大学院法学研究科博士後期過程満期退学。
1990年関東学院大学着任、91年の法学部開設以来、学生の指導に取り組む。
2014年法学部長就任。

先進的な取り組みと地域連携について井上恵子園長に聞きました 食の楽しさと大切さを体験する「食育」

皆で食べる楽しさの中で
元気に育ってほしい

充実した食育環境は、のびのびのば園の大きな特色です。給食室、ランチルーム、キッズキッチンを完備し、管理栄養士2名と調理スタッフが作る給食を毎日子ども達に提供しています。また、食に関する情報を楽しく掲示したり、年齢や成長に応じた様々な活動を通じて、子ども達に食の大切さや楽しさを伝えていきます。

年長の子も達はランチルームで、自ら分量を考えながら盛り付け、配膳して給食を食べます。食べる前には、どう体がいいのか、どんな人が育てた野菜か、どんな国



関東学院のびのびのば園 園長 井上 恵子



▲ランチルームでお友達と楽しく食事

くださいますね。他にも、子ども達が街の飲食店に実際に行ってみたり、近所の畑でサツマイモを植えて収穫するなど、地域の方々と連携した体験プログラムも実施しています。

入園するお子さんの中には、食べることに興味のない子、給食を嫌がる子、好き嫌いが激しい子も多いのですが、ここで生活しているうちに自然と食べるようになりま すね。例えば、子ども達が園庭で育てた野菜を皆で一緒に調理して味わうと、野菜嫌いな子でも食べてしまうんです。興味や関心次第で食欲や嗜好は変わってくるのだと実感します。



◀可愛いコックさん達がピザ作りに挑戦

また、園児だけでなく、子育て支援の一環として、地域の子ども達を対象とした食育プログラムにも取り組んでいます。例えば、小3から中1くらいの子ども達を招き、一緒に料理を作って食べたり、ゲームを楽しむ催しを、大学の栄養学部の学生達と協力して実施しました。長期休暇中の昨年12月と今年3月に1回ずつ、そしてこの夏休みには3回開催し、地域にも浸透しつつあります。これからも子ども達が安心して過ごせる居場所作りを推進していきます。

また、今年7月には「第11回かながわ食育フェスタ」にブース出展し、本園の食育についてパネルや資料で紹介しました。こうした機会を通じて、少しでもお役に立てる情報を発信できれば嬉しいですね。今後も地域や家庭のニーズを捉え、食育を一つの強みとする園となっていけるよう、地域や大学とも連携を図りながら取り組んでいきたいと思っています。



▶自然の大切さを学ぶ園庭栽培

インフラを活用した教育の現状と展望について岡崎一実校長に聞きました 「伝える力」を伸ばすためのICT教育

デジタル・ネイティブ世代の
子ども達に必要な教育を実践

今の子ども達は生まれた時からICT機器に囲まれて育っています。スマートフォンで論文やレポートを書く若者はもちろん、もはやパソコンやキーボードを知らない若者すら登場するなど、世の中は予測できない勢いで変化しているのです。

そんな21世紀の社会を創り、担っていく子ども達に必要な資質は何かを考え、本校では「ほんの学校」と「ICT教育」を柱に、アナログからデジタルまでと称して多様な教育を展開しています。このうち「ほんの学校」は、活字と親しみながら想像力や自分らしさを伸ばすことを狙いとしています。こうした能力は将来、いかなる社会を生きていく上でも大きな強みとなるものです。

一方、加速する社会のデジタル化に対応するには、小学校の段階からICT機器に自然に触れていく学習環境が必要です。そこで2013年に最先端のICTインフラを整備しました。全館をWiFi化し、教室には電子黒板（インタラクティブ・ホワイトボード）と超短焦点プロジェクターを



◀動画を確認しながら算数の図形を描いてみる

設置。子ども達の手元や教材を簡単に映し出せる実物投影機や、教室のどこにいても明瞭に音声が届くこえるラインアレイスピーカーも導入しています。また、PCルームにはノートパソコンとiPadを40台ずつ完備しています。

ICT機器を活用した教育の狙いは主に二つです。一つは、教員側が活用することで、画像や映像を取り入れた授業を実践し、子ども達の意欲や理解度を高めることです。全教員がノートパソコンを所持し、各教科でデジタル教科書や教材ソフトを使って、言葉では伝えづらい図形や事柄を効果的に説明しています。また、iPadを活用した漢字や計算のドリル学習も行っています。



▶パソコンを使って楽しくお絵描きする授業

もう一つは、子ども達自身が「伝える道具」としてICT機器を活用し、技能習得や思考の拡大を目指すことです。パソコンの授業では、低学年からペイントソフトによるお絵描きなどで基礎を学び、中学年からはパワーポイントなどのソフトを使った制作や、iPadで撮影した画像の編集・加工にも取り組みます。高学年では自らテーマを設定し、グループ学習を実践してプレゼンテーションに挑み、豊かな表現力を身につけます。

こうした取り組みに加え、2020年度から必修化される「プログラミング教育」を見据え、レゴ®を組み立ててiPadで操作する教材「WeDo2.0」を導入しまし



関東学院小学校 校長 岡崎 一実

た。プログラミングの課題に取り組み、試行錯誤して答えを導き出す学びを進めていきます。今後はインフラ整備の見直しを図り、さらに一歩先へと発展させたいですね。将来的にはiPadを一人一台ずつ導入したいと考えています。

いずれはノートや鉛筆といった文房具と同じように、各自がデバイスを自由に教室に持ち寄る時代が来るでしょう。とはいえ、鉛筆で文章を書いたり、本を手にとって読むことの重要性は今後も変わることはありません。デジタルとアナログが共存する環境の中で、「どんな時に、何をどう使って表現するか」を学び、発想や思考を広げていく教育を今後も推進していきます。



関東学院大学 硬式野球部 投手コーチ

藪田 安彦 さん

1973年大阪府生まれ。上宮高校、新日本製鐵広畑を経て95年ドラフト2位で千葉ロッテ入団。06年WBC日本代表。07年最優秀中継ぎ投手獲得。その後MLBカンザスシティ・ロイヤルズ(08-09年)、千葉ロッテ(10-13年)、13年現役引退、解説者として活躍中。

現役引退から約5年を経て、指導者の勉強を始めたと思うって矢先、縁あって硬式野球部の鈴木聡監督から要請をいただき、今年2月よりピッチングコーチを務めています。僕の持つ技術や経験を選手達に

わかりやすく伝えていきたいと思っています。僕にとって大学野球は未知の世界で、最初は部員の多さに驚かされましたね。投手だけで50人近くいる人数を、どうやって練習させればいいか、どうすればうまくいくのか、僕なりにいろいろ考えました。そこで春季リーグ終了後、投手全員と一人ずつ面談をして、どんな投手になりたいか、そのためには何を強化すべきかなど、今後の練習方針について話し合いました。

投手は一人で練習する時間が多いので、目的意識やイメージをはっきり持つことが大切です。僕自身、選手時代は上から押さえつけられることが嫌いなタイプで、特に理由もわからず練習させられることがすごく嫌でした。

で、今の自分が持っているものをしっかりと磨いて伸ばしてほしいですね。平均的にきれいにまとまったチームより、個性が集まるほうが面白いですし、関東学院らしいと思います。

僕は3年生の時に大学選手権初優勝を、翌年は主将として連覇を経験しました。思い返すと大学時代が一番楽しかったですね。変な奴ばかりで、でもラグビーだけは真剣で(笑)。当時の春口廣監督も伸び伸びやらせてくれ、結果を気にせず、純粹にラグビーを楽しむことができました。

“ONE for ALL, ALL for ONE”という言葉がありますが、体を張るラグビーでは、仲間を大切にする気持ちや、人のために働く犠牲心が大事です。何事にも通じる精神だと思いますが、僕はラグビーを通じてそれを学びました。いろんな意味で成長させてくれた関東学院に、今度は自分が恩返しをしたいですし、今の学生達にも何かを得て卒業してほしいと思います。

昨年は関東大学リーグ2部に降格しましたが、今年は必ず1部に戻ります。次はベスト4を目指します。やっぱり「カントー」が強くないと大学ラグビーは面白くありません。もう一度、強い時代を取り戻せるように、チーム一丸となって進んでいきますので、ぜひ期待しててください。



▲ バレンタイン監督のもとで中継ぎに転向し大躍進
プロ(国内) 通算 48勝 72敗 67セーブ 112ホールド

元メジャーリーガーが大学硬式野球部・投手コーチに就任 技術と精神、経験を余すことなく伝えたい



で自分の持っている力を全て出してほしいし、そういう雰囲気作りをしていきたいですね。

僕はロッテ時代にボビー・バレンタイン監督と出会って野球観が変わりました。悲観的な言葉を一切言わず、話しやすく、選手としてはやりやすかったですね。やはりコミュニケーションは大事ですし、部員達には聞きたいことがあれば遠慮せずにどんどん聞いてほしいと伝えていきます。春季リーグでは3位と悔しい思いをしているので、秋はぜひ皆で喜べる結果を出したいですね。



関東学院大学 ラグビー部 コーチ

立川 剛士 さん

1976年佐賀県生まれ。佐賀工業高、関東学院大学を経て、東芝ブレイブルーパス入団。ポジションはフルバック。2016年引退までに3度のMVPと2度のベストフィフティーンに選出。日本代表通算キャップ数21。

あつたので、引退する1年ほど前に本学ラグビー部の板井良太監督にお願いし、週末だけ大学で指導をしていました。引退後は地元佐賀県で高校生対象のラグビークリニックや国体の成人男子チームのコーチを務めるなど、後進の育成に力を注いできましたが、今年4月1日付で正式に本学コーチに就任し、指導にあたっています。

僕らの時代と比べると、今の学生達は真面目な反面、がむしゃらになり切れない部分がありますね。上手いとか下手とか関係なく、グラウンドでは全てを出し切ってほしいと思います。ラグビーの原点ですし、そうしなければ仲間の信頼も得られません。だから「手を抜くな」「チャレンジしろ」と常に伝えています。その上



で、今の自分が持っているものをしっかりと磨いて伸ばしてほしいですね。平均的にきれいにまとまったチームより、個性が集まるほうが面白いですし、関東学院らしいと思います。

僕は3年生の時に大学選手権初優勝を、翌年は主将として連覇を経験しました。思い返すと大学時代が一番楽しかったですね。変な奴ばかりで、でもラグビーだけは真剣で(笑)。当時の春口廣監督も伸び伸びやらせてくれ、結果を気にせず、純粹にラグビーを楽しむことができました。

“ONE for ALL, ALL for ONE”という言葉がありますが、体を張るラグビーでは、仲間を大切にする気持ちや、人のために働く犠牲心が大事です。何事にも通じる精神だと思いますが、僕はラグビーを通じてそれを学びました。いろんな意味で成長させてくれた関東学院に、今度は自分が恩返しをしたいですし、今の学生達にも何かを得て卒業してほしいと思います。

昨年は関東大学リーグ2部に降格しましたが、今年は必ず1部に戻ります。次はベスト4を目指します。やっぱり「カントー」が強くないと大学ラグビーは面白くありません。もう一度、強い時代を取り戻せるように、チーム一丸となって進んでいきますので、ぜひ期待しててください。



▲ トップリーグで3度のMVPに輝く

大学選手権2連覇を達成したレジェンドがコーチに就任 強いラグビー部の復活を目指して

母校・関東学院大学にコーチとして帰ってきました。トップリーグや日本代表での経験を活かし全力で取り組んでいきます。社会人として17年間プレーしましたが、将来はコーチングをしたいという思いが



株式会社ナップス 代表取締役社長 望月 真裕 さん

1982年横浜生まれ。2005年関東学院大学経済学部経営学科卒業、スターツ株式会社入社。2007年株式会社NIKKEI創業者として代表取締役社長就任。2015年株式会社ナップス常務取締役。2017年同社代表取締役社長就任。

僕は横浜で生まれ育ち、大学では陸上競技部に所属して箱根駅伝を目指していましたが、残念ながら出場は叶いませんでした。が、陸上競技部の仲間とは今でも正月三日に集まり、朝から酒を飲みながら駅伝を観るのが恒例です。

卒業後はスポーツ用品会社に就職しましたが、1年ほどで退社し、新横浜の居酒屋チェーン店でアルバイトを始めました。その店の関係者のツテで、テレビ番組「料理の鉄人」の調理助手をたまたま務めることになったんです。助手といっても、有名な店で働いている人ばかりで、何もわからない僕は必死でした。でも、その時に思ったのは、段取りを考えたり、相手の気持ちや周囲の方々も僕のことを可愛がってくれるようになり、すごく勉強させていただきました。道場のおやじさん

広報から

近未来の社会では、IoT (Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、人工知能 (AI) やロボットによって課題や困難が克服されていきます。人工知能やロボットは生活に不可欠な存在になると同時に、これらによってマニュアル通りの定型業務を中心に多くの仕事が置き換えられていくことが予測されています。そんな「未来」で活躍するために私たちに求められるのは、定まった仕事を順当に「こなすことができる」能力ではありません。国籍や世代や立場、専門分野が異なる様々な人と共に、議論しながらアイデアを出し、課題を発見・解決するための「新しい価値を生み出していく力」です。では、「新しい価値を生み出していく力」は、どうすれば

・編集：関東学院大学 広報課 ・写真：藤間 久子、森 日出夫 (アマノスタジオ) ・文章：坂尾 基子 ・デザイン：高橋 稔、竹本 真実 (株式会社 CCN)

両親を含めて家族全員、関東学院の出身です。小学生から三春台で過ごし、中高では野球に明け暮れ、大学では経営を専攻しました。ナップスは祖父が創業した会社です。私自身は会社を継ぐ気はなく、高校生の時から

起業することばかり考えていました。大学2年生の時に不動産業界で起業しようと決め、宅地建物取引士を取得。卒業後は不動産会社で経験を積み、24歳で業界の古い慣習を打ち破るべく不動産ベンチャー企業を設立しました。年商7.6億円のグループ



オートバイ用品店 ナップス

神奈川県7店舗をはじめ国内22店舗・台湾1店舗、計23店舗を展開する日本最大級のオートバイ用品店。ウェブショップは30万点以上の品揃えを誇る。各店舗情報はホームページ参照。(写真は台湾店) <http://www.naps-jp.com>

ば身につけることができるでしょうか。

学院各校では、学生生徒が主体的に学ぶ動機づけになるような実践的な社会連携教育の推進や、次の社会で求められる知識やスキルの基盤をつくるICT教育やグローバル教育に積極的に取り組んでいます。また、社会において自立して生きるための広く深い知識と技術を養い育て、どんな時代にあっても、人のため、社会のために尽くすことに喜びを感じられる人に成長できるよう、校訓「人になれ 奉仕せよ」を実践する教育・研究の向上を図っていきます。これからの関東学院のさらなる挑戦にご期待ください。

関東学院大学 広報課 (045) 786-7049 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

若くして成功した手腕で老舗に新風を吹き込む オートバイの楽しさをもっと多くの人へ

道場六三郎氏の教えを受け、サラリーマンから名店の料理長に 奇をてらわず、真摯に、和の真髓を貫く



銀座ろくさん亭 料理長 宮永 賢一 さん

1990年関東学院大学経済学部経済学科卒業。人気番組「料理の鉄人」助手を務め、95年「銀座ろくさん亭」入店、道場六三郎氏に師事。2003年横浜「和食 結」料理長を経て07年「銀座ろくさん亭」料理長就任。

手をとって、よく言われます。早朝に市場へ行き、午前9時過ぎに店に入り、帰るのは夜10時半過ぎ。やはり体は丈夫じゃないと駄目です。実は7年ほど前、髄膜内神経鞘腫という難病を患い、右手や下半身に障害が残る可能性がありました。その時、おやじさんが手を尽くして名医を探してくれ、奇跡的にこう

んに誘われて銀座ろくさん亭に入ったのが1995年。本当に大変なのはここからでした。10代から和食を学ぶ人達がいる中に、桂剥きもろくにできない27歳の素人が入ったわけですね。辛いことも多かったですが、笑顔で一生懸命に頑張っていたら見てくれる人は必ずいることも知りました。今は銀座ろくさん亭の料理長を務めています。創業から47年、カウンター席もあり、肩肘張らずに料理と酒を楽しんでいただける店です。帰り際に「ああ、この鮎、あと何回食べるかな」なんて言って帰る常連さんがいるんです。そういう言葉を聞くと、奇をてらった表現よりも、お客様と真摯に向き合うことが何より大切だと教えられます。おやじさんからも、お客様が何を喜ぶかを考えながらやれよと、よく言われます。



▲ 彩りと旬をたっぷり味わう秋の料理

銀座ろくさん亭

東京都中央区銀座8-8-7
第三ソワレ銀座ビル8・9F
☎ 03-3571-1763
営業時間：17:00～22:30 定休日：日曜・祝日
＊ランチは10名様から御予約可
＊カウンター席・個室有



▲ 師である道場六三郎氏と一緒に

して仕事を続けることができました。人と違う入口から和食の世界に入っている、いろいろなことがあります。たけど、全てが良経験ですし、様々な人に支えられて今の自分がいるんだと思います。

お知らせ

ふるさと関東学院募金のご案内

ふるさと関東学院募金は、関東学院各校の教育奨励を目的として

2017年3月に募集を開始いたしました。

関東学院の応援したい学校を指定して寄付していただくことが可能です。

ご寄付をいただいた皆さまにはお礼の品として、本学院の卒業生が

経営する店や会社で製造・販売している商品をお届けいたします。

学校法人関東学院に対する寄付は、特定公益増進法人への寄付金として、

確定申告の手続きにより、税制上の優遇措置を受けることができます。

関東学院の発展のため、皆さまのあたたかいご支援を賜りたく、お願い申し上げます。



▲ 関東学院グッズセット

寄付のお申し込みはこちらから

ふるさと関東学院募金

<http://furusato-kanto.jp/>

(インターネットからのお申し込み)



※入学(園)された年内に新入生保護者及び新入生が寄付された場合は「入学に係る寄付金」とみなされて寄付金控除の対象になりません。

お礼の品の提供者を募集しています！

寄付者へのお礼の品を提供していただける事業者を募集しています。

学院への寄付推進だけでなく、貴社商品のPRの一環として、

皆様のご応募をお待ちしています。

募集条件

関東学院各校の卒業生が経営する企業

お礼の品提供者のメリット

特設サイトへの無料掲載 / 商品は関東学院が購入

関東学院募金担当 ☎ 045-786-2685



▲ ベアお食事券 ランチメニュー
特別小懐石コース



▲ めばちまぐるづくし 潮(うしお)



◀ グランドピアノアレンジメント
(光触媒の花)

